

昭和六年日記

夜光雲

卷六

山嶺立耿太郎日記  
昭和六年八月十五日

故園毛

母何植忌人

大夏中ん

僅はもゝ歌の作本ない!!!

紀州御坊行

淡紅く

眞夏の合歓の

咲く見本は

端つ川瀬も見えんけること……一

白波は

鯉まゝる瀬に

寄りゐたり

小舟

その瀬を

廻りて去りぬ……二

紀の國の

古き御寺の

石階は

竹柏の茂木の

蔭の落ちにけり……三

洋中の

阿波の雲居し

日はたはすぬ

珠の光も手は

光合めぬ……四

白雨

浪のたぎりの

新花の淡木綿に降り

明かりけり……五

大和國原

にはち雨

峽の町を過かにけり

いま鳥見山に

なみくその雲……一

古の女舞の川原の

薄原すいぎ

合飲の法花も

ひるは咲かしむ……二

海風吹くことまは

一

あま物さう真日に向ひて門開きちるき身女の隠はいつくしまかも

二

あは木あは木ひるの渚の砂の上ん大の交合はさうま木にけり

三

かしあつき書はならけ木はまなしきほとう様構もまうへざりき

四

極楽瑠璃莊農の気はえんさて交合つるみ蛸蛉は流水で行けり

悲しい

アラスカ語を愛する

日々語りは

私は破ちをしたら！

x

月に日を描く

つまなく描く

雲のある風景

魂のふるんぐア！！

x

青い穴の気の中

因茅の草の中

じつとくつあこせうおめこころ

焦つてあこせうおめこころ

x

王女は奥土人は

人妻ゆえに

最も好ましい

奥土人お話ししましよあ？

x

朱雲は山の背方ゆえに昇り山崩る、まてを我を返らせり

人の子の死んだらうても大空に雲立つるはあまた

x

私は海月の様を静かな水に流し

海の潮の草土を好まない

二本は悲劇の甘えである

(八一五)

x

かなしや海の色を濃藍と申すなり

x

沖海 潮のほらみるわく魚らの地月すちのいろは若くあたらし (八一六)

x

わかいのち短くあらわおをましき死相は人いりせせうむゆめ

x

銀漢はも更けたりみんをめの海あらのぼるまらかくんつ、

すいなしのなくやちまたの

海章

いかり波をせまるとは海遠の自ましかまを見つたのしむ  
我近しまとはなる武庫山の林麓の法に波は空可せつ

武庫山の草山をせる頂に三角点見え気は澄みにけり  
あつちををけしひとも未すなりし波におも風立たむとするむ

波はあはれおちとく小なくまらむりすせ(一)つらうものか  
残暑はいまも残しも砂波のまやぶに書は人のたまたま小す

けう海はくらげもつしとあすらばせつ口をさばりしはくらげなりしよ  
いかり波をせまるとは海遠の自ましかまを見つたのしむ

海神のわきにふる来る犬の眼の直の叙きとふと怖ろしくなり  
腫れまじ船は沖を行けりしがやかく轉回するはなにかあらむ

た(は)蘆葦の如く相たつしむ  
遠ま磯に赤ま磯の(一)すは茶店なり松はしるは連り者し

いすくいすく軍艦か九隻なるるまを等しき間隔を保ち  
軍艦は磯泊す(一)もなせりし彼我の距離はなるるなるる

武庫山の前山をせる赤は山かしこには水行ましことあり  
武庫山の秋はほくする植物の形はまたた水は知るなり

波空可す川口の杭に立つ人は何釣るならむを釣る魚  
走る魚を釣り上げし人群をむらり空可するの内に魚は海をけり

かたつみの潮はまことあしき水水眺見える海に向ひて坐る  
海原をまゆまかくゆき船のとほまことい家をこふるものらし

海原の潮の速きなるるは船の航行を見つたのしむ  
沖遠く船の橋立を築けり屋敷を築見むとて思ひけり

海原のたたく泳ぎ深り来たばいまたも鳴るとはまき海鳴り  
この海をみごと行ま交り汽船はは曲なりし折れこころもあらし

白の光あまゆし水は海に向ふは水をつくるこころの人は  
かたはたんももろつこの風吹まけりまことまくらくならんまこれけり

柳子の木を揺るカフエあらば行まてすたむかくてうたつてむ  
やれりま波のゆるも深げなば深なる大は海に向ひぬ

く水けげんぞと鳴る波の音海風に交り中まつあまは  
海風はしまし吹きて夜をうけりいそつたあまは目物しめりつ

銀河はまこん海に流つるなり海面に近くうすくなれども  
明しあしわくらんあまをさる星のこころとく明し海面はくらし

海原のよるしつまつあまのかはすかから形つすとするか  
いそいそとわおもまこは海に支かこし海中の魚と見らるるなるむ

一八の度を見るとの魚の眼なるゆえ星を運行はたしあめとむ  
いそいそと海にすく赤眼魚一夜は支うみけり佳なり

三月月地車に近く滑り若しわか眼に似ると自らは知る  
月も日も海に沈む地に伏せたるし地に沈むは何なはななし

わなはたい海面を這ひて余念をなし海の族らと噂はるなるむ  
あはれ直ぐ海面を行なわば死ぬるなり海月の群は行ま交りけり

海は相親の理を止月たまひ感嘆したまひきありかたき祖父は  
海月もしんけんをなば海の面を群れて行くなりわなは然らず

着物を脱いだまら(一)らぬ人肉をとりい海は去来をかりか(一)らぬ海はななし  
あはれ水何れ水はたな水と海に流しめをぬるむ人は

いたましまむらとり(一)まなげかし人このこころはしまもこころ水す

佛母摩耶山  
初利天上寺

摩耶山天上寺 (八一九)

細雪の水流る、と見とむんば雪のくらく白く遊ぶ

新川常山 雪は深しもこのあたり 蝉鳴く三夏のまじり目暮し

青空は山の彼方 従事 立て月 杉の 玉乃にままゆく 照く

摩耶やまの杉の 玉乃立のまじりなる 蒼蒼空に 陽はありけり

一道の白く 毫先はあまゆく 静けき海を 光ち照らしけり

幽けくも 梅林の下草の花 咲くみ 石段のぼる

おほからに 登るものもなし 山草の ちぢたゆのぼる 白苔はあけり

群松の山 谷とどえして 野なるは 仰南の園と 教つらぬぬる

加古の島か 空家島か ありむと ほとむ 海磯の 線外に なるは ぼるけき

さ鳥啼きて しのと 思ひ 遠島を 漂べる 油にと 入りて ありけり

秋のいろ 眼にし 入りぬ なるつ なし 友とゆく 道の けづり きの 花

佛母山 佛を 出せし 時

佛を 出せし 時 山に 團見つ 天地 所生を 養ふし と思へり

山 空深く 赤泉は ありて 甘露 葉つ 朽ちたる 玉と 高かざりけり

百丈山 もいまは 終る 雲一土の 山麓に 咲き 出るは ほとむ きの 花

腹赤き 船 浮かしめし する きの 波なき 海は けいり に見ゆ

山下に 下り 来れば 谷深く 水あり する 見葉の 二ふの けいり 見ゆ

いんじんと 蝉鳴く 谷の けいり する 見葉の 作は けいり 見ゆ

くさき けいり 水 集る する 見葉の 文を 泳か せけり

山 崎の 曲角 曲れば 日向 なる けいり する 見葉の 文を 泳か せけり

この 一日 強き 光に けいり する 見葉の 文を 泳か せけり

x

増田 忠臣

か、石は 見と 友と なる 日の 夕 白が 首巻の こと 詠うる、かな

首巻を 建て ねばと して 詠う たり たり ぬ 水は なる 玉 (と 酒と けいり)

折々に ぬかぬ 安さ あり ぬ (り 死) して 子いも けいり する こと 用ひ

ゆい 土牛は 海風 窓に 吹き 下り ぬ けいり する こと 用ひ

街の 灯は 海に 懸て なる けいり する こと 用ひ

友ら けいり する こと 用ひ

か、けいり する こと 用ひ

ま、けいり する こと 用ひ

ま、けいり する こと 用ひ

ま、けいり する こと 用ひ

祖文 東巻 回復難期 (八二一)

祖文の まな なる けいり する こと 用ひ

朝々に 咲き ぬ けいり する こと 用ひ

よき こと なる けいり する こと 用ひ

ふた、けいり する こと 用ひ

龜強 (中之島の圖書館) (八二三)

圖書館の 地下 室にして 法律を 説ける 書は けいり する こと 用ひ

こは ぬかぬ けいり する こと 用ひ

ブルジョアの 世紀 終りに 近き 時 けいり する こと 用ひ

か、けいり する こと 用ひ

わ、けいり する こと 用ひ

ゆいんたをまりて若の空におほは雲出んけり夾竹桃の花

建篋中の天守閣より橋の上に見ゆる川もたつめこありき

おは小華を近づきたれやまつるまじりてかみらあわづんのむすめ

ルンペの群と行き交りあえなくも眼はつらみ得もあけやらす

かの坊頭破衣の群の強き眼を思ふははるるあましのふれつ

まわのころわの感傷は夕水の川面へ下り流水もとす

感傷の夕年は暮の川をわが海面へあふれを傳(や)とす

甘藷畑 (八二四)

夕づく陽乾ける畑にまじりけり畑上落着はころかりにけり

あはあはとななめに夕陽が照らし出す落着の肌使もまじりけり

向日草は畑の隅にまたむけり夕の空にもある涙まじり山

伊古麻山と春日野

いこま山 春日の音にくらりけり夕の即句かな ばせと

能勢 三島

わたし日は天つ雲影にのころりてほわたつみの光りたる夕や

夏よりせむもほつたぞりそめあふり 蟬鳴くころはあふり来る

ほいせん花 花もあめ屋のうら 畑はこりばせつすわんてゆくか

ほいせん花の弾ぞあまじりつ 海にゆるあめゆるとてわらうなるなり

ひとごえのまじりてまき曲りかど白ま 群衆の女の児現ゆる

はるかなる海の水脈はあらはれぬにぶく光りて舟載せこゝろ

すずせはまつ虫草をそよませり伊古麻の山に日はかがり来ぬ

天雲は山の頂の飛行塔にまた木は登り鳥の鳴く如し

あま雲のおほ(る)またき山頂は隠れしなりめ鳥の鳴く

あもり来むと友とえむつ、のたはらのせの児はもまのすとす

おれはは 聖天木にまみりたり杉の中道のほり来りて

あつたらしむしくなりぬ 満月は雲を破りてまをみつるを見れば

ほのほの山河白く支れせ 大和の國を月を照りぬ

向平鏡

秋立つや伊古麻の山の女郎花

春日野 中甲義城

杉の橋のこがえんけりて雲乱れ月去むとす原はあすむに

あなまじし女のことを語りつて暮れあせいとあそぶに

わくらま鹿皮は春日原山の石佛蓮に

白毫酒を飲じゃ

そす月の明い法杉を鏡つて生物の飛行

念の声私して蟬の鳴くときまに

石佛の強靱様は来未依本のわんこの

眼おしもまが字を賜ふべく

地蔵菩薩はわんこの来未を望むるそに

満星のさるを感とたまは

白毫酒のこゑは白い走り身し込んで

或は雲を化して雨を降らせ 或は散華を化して我等の肩に積るをよこす



月かほのみに形懸はせる三立の山は見よに白鹿くし

魔々たる土堀をめぐりサ鳥の甚本にこぼろをくみくみ啼啼まあのみららし  
本へ向もる月の走に甘言サ陵どち青く照りつゝもふしたまはむ  
御佛の肩にたまふる月まけはわの見てゆふば尊やらぬと

まみとこいしといふとまは  
しんじつたまらずおもふなり

ことにこぼろぎなくよるは

手みがふしおもふもはふこ

わがくもりたるふとみさへ

まみとこよるにぬゞやまぬ

すなはちもたはたまゆらに

ふたふたのさむしとせは

おもはぬまへにやまとして

まみと思へば一四城の

ま月ま玉をばほしといふ

朝にゆくへにながめつつ

まみかまなこをなしまむ

まこし珊瑚のまみの唇は

いまは性根もつきはてて

おとすふみは  
海神のまんと

直ら珠のこくえりこよ

あはれゆくへははまなけ

おほめくいろのをみなへし

にほひばあしあじばま

けに秋草はいたしへの

あてなるこも思はせぬ

わづらふこはしので物の

むしのこゑよりあすあなり

まみはわをば

四りみたまはず

あはれをみなむつみあせ

むかし大徳のサ活しにぞ

いまわあまみはふるあかく

わを眼しめずをまたま

あつる地獄もよ本にこそ

こゝのよろこびあうぬへし

わ本はらづこにゆふばとぞ

この幸だにもうんやらむ

明き星めて語りたま

としにふと下のちよせとば  
たのしむともちらぬと

明き見ころ ~~あつむ~~ ~~と~~

わなばなげまのまよるな

あはれとよも見えたま

x

4草のちたもてりぬべし

啼く虫のちもたこらべし

かくてぢう(ぼ)をふるも

なげまたえさの十二た

秋はふとこし長けす

たもまほしき音もまじ

x

まがまめには八草の

しじろの 様をえがかしの

板に海におく 茂つゆを

したと密とはなうぬべし

立石いなまきまめに先けても

x

秋むりは野に立ちあて

あはれあはれこもしらの

ここの時たちぬ

世のおはりあの子なきしな

密のわにみじめなるこの

ふとりまにふりなげけ

月みけはまりにまどして

この心によらず

ふけて風をにぬ

あまらぬよとて

x

つたの 甚まのなれぬと音立はば

せんをまこし あまらぬも果つべし

秋か板につちあまて月おこ

あ、こたまさるころ おうんすり

りのにせよとよ

x

土壇の穂すいま 葉の中

ふたりは二つをまたりにぎ

すいまも 枯れて 折れぬば

ふたりは二つを止め はけ

x

あ、まとのすいまのつみ

まみとゆみば

あ、まみとゆみば

一み見ゆる丘にいたりて

ノチあけむ

あ、うきあけかゆかふもてと

x 小唄

赤いこんぼはゆいまたに

唐立子子畑に

たまふあて

いんかゆわやらひとぢやわら

x

ゆにたまいらんしおか

いんかゆわやらひとぢやまつり

一死な情女と

なむせめに

x

わしは <sup>おすこ</sup> ~~いんか~~ は <sup>は</sup> ~~いんか~~ に

情女 <sup>いんか</sup>

こゑいじまんて

女 <sup>いんか</sup> 郎 <sup>いんか</sup> と <sup>いんか</sup> いく

x

を <sup>いんか</sup> ~~いんか~~ <sup>いんか</sup> の

十八むすめ

を <sup>いんか</sup> ~~いんか~~ <sup>いんか</sup> ま <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> り <sup>いんか</sup> や

ふあに <sup>いんか</sup> と <sup>いんか</sup> ろ

x

いんか <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> あ <sup>いんか</sup> へ <sup>いんか</sup> へ <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> 地 <sup>いんか</sup> 原 <sup>いんか</sup> あ <sup>いんか</sup> め <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> ば

月明 (八三八)

~~藤末の夜を~~ ~~雲と~~ ~~は~~ ~~に~~ ~~け~~ ~~り~~ ~~月~~ ~~の~~ ~~光~~

棕櫚の葉に

月の光は

二スゴま

~~命~~ ~~を~~ ~~あ~~ ~~り~~ ~~け~~ ~~り~~

風は <sup>いんか</sup> ~~いんか~~ <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> ば

x

と <sup>いんか</sup> ~~いんか~~ <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> ば

才 <sup>いんか</sup> ~~いんか~~ <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> ば <sup>いんか</sup> 寝 <sup>いんか</sup> 息

思 <sup>いんか</sup> ~~いんか~~ <sup>いんか</sup> へ <sup>いんか</sup> に <sup>いんか</sup> ぞ

淋 <sup>いんか</sup> ~~いんか~~ <sup>いんか</sup> し <sup>いんか</sup> せ <sup>いんか</sup> も <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> か

月 <sup>いんか</sup> と <sup>いんか</sup> 虫 <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> 音

x

月 <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> ぶ <sup>いんか</sup> ろ

河 <sup>いんか</sup> 内 <sup>いんか</sup> 国 <sup>いんか</sup> 原

里 <sup>いんか</sup> 芋 <sup>いんか</sup> の

畑 <sup>いんか</sup> つ <sup>いんか</sup> ら <sup>いんか</sup> な <sup>いんか</sup> り

夜 <sup>いんか</sup> 用 <sup>いんか</sup> に <sup>いんか</sup> あ <sup>いんか</sup> て <sup>いんか</sup> や <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> し

二の <sup>いんか</sup> 夜 <sup>いんか</sup> は

西 <sup>いんか</sup> 山 <sup>いんか</sup> と <sup>いんか</sup> ナ <sup>いんか</sup> ツ <sup>いんか</sup> 牛 <sup>いんか</sup> 毛 <sup>いんか</sup> と <sup>いんか</sup> 二 <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> 夜 <sup>いんか</sup> は

安 <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> も

手 <sup>いんか</sup> 巾 <sup>いんか</sup> は <sup>いんか</sup> 二 <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> 夜 <sup>いんか</sup> と

小 <sup>いんか</sup> 夜 <sup>いんか</sup> 床 <sup>いんか</sup> と

あ <sup>いんか</sup> め <sup>いんか</sup> と <sup>いんか</sup> び <sup>いんか</sup> を <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> て

眠 <sup>いんか</sup> り <sup>いんか</sup> と <sup>いんか</sup> あ <sup>いんか</sup> ら <sup>いんか</sup> 石

x

遠 <sup>いんか</sup> 街 <sup>いんか</sup> に

月 <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> 光 <sup>いんか</sup> は

射 <sup>いんか</sup> し <sup>いんか</sup> ん <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> り

ほ <sup>いんか</sup> る <sup>いんか</sup> か <sup>いんか</sup> に

夜 <sup>いんか</sup> 行 <sup>いんか</sup> く <sup>いんか</sup> 雲 <sup>いんか</sup> は <sup>いんか</sup> あ <sup>いんか</sup> り <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> り

x

あ <sup>いんか</sup> ま <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> は <sup>いんか</sup> こ <sup>いんか</sup> う

か <sup>いんか</sup> せ <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> を <sup>いんか</sup> 風 <sup>いんか</sup> は

あ <sup>いんか</sup> ら <sup>いんか</sup> に <sup>いんか</sup> け <sup>いんか</sup> り

遠 <sup>いんか</sup> 天 <sup>いんか</sup> の <sup>いんか</sup> 雲

流 <sup>いんか</sup> 水 <sup>いんか</sup> つ <sup>いんか</sup> 、 <sup>いんか</sup> 見 <sup>いんか</sup> 入 <sup>いんか</sup> 巾

八月二十九日

久し振りに懐かしきあり

我は世一止歳なり

ほうせんくわはせふとまづてわらゐる

海久ゆるきみたらぬわのみにけり

とくまやしもまふしそ空のあやらん

花圃の香いしころみてもくたりけり

右 和州生馬山補遺

中野東治ん感ゆす

感いしな以上何とみしる

二ふ以上何とみしるか

x

立草 ちやんとくアウ

勢いいな (夏(2)2)

一九三一 フレシウリア詩伏木

ルノアル画集

大日本国志全集 東洋思想 一・二

東洋思想辞典

丁史辞典

京都市古地図 花藤の日記

本音辞典

古代社会上下 モルカ

偶蘭画草 命史 クロホトキレ

60. 60 1.00 ? 60 60 40. 50 40.

1.20 1.20

4.70

1938

136 / 7

宮(2)2

古代研究 所へ行く

はなはたききき 沼田頼輔

東方文庫史書考 新村出

Die Nukulare Nacht

私の心は下まきうわつて

私の馬けたる星を追ひける

私の星は夏やなげ居るに居るまゝなる

汗厚は私の星跡である

星跡は赫土の印である

赫土は山の一角塊である

x

私は私の死後の爲に歌を作

生きている中は何の役にも立たぬ歌

私の歌ーあゝあゝあゝ

そしてはつてくわゆる人がある

私は死後の幸せを思いしんがらまいことか

と本故私はいつまでも死ぬないのか

x

いつの儘は魂ののすたしあを呼號した

と本は遺傳のやまひまであり

遺傳は先祖のなをらまであり

おいらまを叫びよその鳥か徹ちよ詩は

ぬい魂ののすたしあを鳥か徹ちある

この三段二節法は

儘に於てはあしからしめ

創始者(遺傳)に於ては

xx

百仕只店の帽子賣場の女の子よ  
僕は君んあを感じたらうか

君は細い肩を画ましく紅を頬に塗して  
ほんとは白く

お世辞をなく  
僕は君んあを感じたらうか

君は此活してある  
獨りで玄液にまじつてましく

僕は君んあを感じたらうか  
僕は君んあを感じたらうか

君は僕を感じたらうか  
君は僕を感じたらうか

君は僕を感じたらうか  
君は僕を感じたらうか

君は僕を感じたらうか  
君は僕を感じたらうか

お嬢さん

お嬢さん  
毎朝のついでに会いませうか

君は僕を感じたらうか

君は昨日令世界を持つてました  
僕のみつめてる眼に会ふと

君はその本を閉まました  
帰るころ僕は妹いませ本を借りました

花ごぼが書いてありました  
今日君に会つて時おまう

本当のことと云ふと  
僕は花ごぼと王期活してたりです

空色のネクライン  
黄水仙の花は調和おとやありませんか (S.S.嬢ん)

新編 聖書

御 視下 前に果に之見し星 先立ちゆきて 幼児の存すと云う上止る (馬太傳二二)

視下 天に天 神の御座の 鶴の如く降りて已の上とまると見給ふ (カ三二七)

光を見 死の地と死の蔭とに坐する者上 支那の木 (リ四一五)

山の上にある町は入ることをなし (リ五一)

西の鬼を去り 豚の入りたれば 秋よみの 群みま山産より 地に馳け下りて 水に死にたり (ハ一三三)

視下 種播く者まことと云ふ 播くと云 路の傍にたろし種あり 鳥まきと豚を 土よりま 硬地  
にたろし種あり 土深からぬにありて 連に萌え出たれど 日の目かりし時やけて根をま 政に枯  
る 其の地にたろし種あり 其育すて之を食ふ 二良き地にたろし種あり 或は百倍 或は千  
倍 或は三十倍の倍を結べり (ハ三三四)

皮の毒走りを抜きあつて、林のくたけに之を束ね、束々は集めて我が倉に納めず(馬太傳三)

二九

天國は一粒の芥種カイジュウの如し、人二本を取れば、煙に播く時は、萬の種よりも小けれど、之月には、他の野草よりも大きく、樹となりて、空の鳥も宿す(ク十三、三十三)

夕には汝、「内之毒まぬ時ぞ」と言ひ、また朝には「そら赤くし日暮るは、今日に風雨カゼアメなると言ふ(ク十三、三十三)

視ふまも雲、ひらりと西復ふ、また雲より声あり、曰く「二本は我が屋敷も子、山か懐か者なり、汝ら之に懸け(ク十七、五)

路の傍を、一もとの無花果の樹をくち、その下に到り給ひしに、葉の外は何をもとまらず、之に向つて「今をのちいつてもお宝を結ぶお水」と言ひたまは、いとくくの樹をさむころん枯んたり。(ク廿一、十八)

パリサイ人、汝らに薄荷ウツクシ、蒔草ウツクシ、クミンの十分の一をゆめて(ク廿三、一三三)

電イサナの車より出で、一面まで閃まわらる如く、人の子の妻もあしひらん(ク二十四、廿七)

「死骸のちと皮には、元鷹鳥集らん(ク廿四、廿八)

二人の日の影、教の後直ると日はゆく、月は又と見えせり、冥は空より降す、その萬の鳥のさし、高ん(ク廿四、廿九)

無花果の樹より、時をまかへ、その枝をいへるまくなりて、葉葉あは、夏の近きを、知(ク廿四、廿二)

その中の一人はしりゆまて、海綿をとり、酸を葡萄酒を合ませ、甚だつけて人々に飲ましめ(ク廿四、廿八)

世に野に呼はる者、声す。まづ通を備へ、その路すうをたてせよ、もうもろの各は、理めん、もうもろの山と、同じ平けら、曲りたるは直く、峻しきは坦らなる、路となり、人みな神の教を、久ん(馬太傳福音書三白)

狐は穴あり、空より鳥は、地あり、まると人の子は、枕す、所なし(ク九、五九)

鴉と鼠と、播き、州より、納屋も合もなし(ク廿五、廿七)

「百合の花は見えぬ、糸が、縫らざるなり(ク二二、二七)

汝ら雲の西より起り、東へ来ば、直らば、早雨またらん」と、早しと然り、また南風吹けば、汝等、「強まらんと」と、早しと然り(ク二二、二七)

日はまひる、(八、三〇)

昔草の野はつまで、向て雲ゆく、古空の欠け、空の辺にふりて、おるごりの立石に

取至歌を唱(は、しりたること、淋しきに

反りかて、わんは泣きけり

凌宵華、咲く空の外に、子供らの遊ぶこゑ、おらん二のましり

大空に、ゆれ、木、梢、いと、じやくたよと、弟も、もつて来た

いつか泣きます、泣かぬ、ゆくかたに、丘の、人、白く、ま、見え、あ、女の子ら、遊びます、声、ま、あ、古、讚美歌を。

女の子ら、遊びます、声、ま、あ、古、讚美歌を。

女の子ら、遊びます、声、ま、あ、古、讚美歌を。

女の子ら、遊びます、声、ま、あ、古、讚美歌を。

新約聖書

カリヤの人々よ、何故天を仰いで立つ、汝らに敵水て天の奉けらねたまし此のイエスは  
 汝らに罪を免れりゆくと見たるもの如く復まり給はん（使徒行傳一ノ十一）  
 イスラエル人よ、吾んが荒野にて四十年の肉。屠りし獸と犠牲とを我に獻げしや。  
 汝らは拜せんとして造す像、即ちモロの草布屋と神の像を拜せたり。われ汝らと  
 ハビロンの故方に移さん（七、四三）  
 ペテロ祈るとして屋の上に登る。時は晝の十二時頃なり。飢えて物欲しくなり、人の食  
 を調ふ。ほい我を食し地して、云開け。岩の隙を見ゆ。大なる布の如き物にして、四隅も  
 て、地の紐を下をたれり。その中諸種の田草あり。地を圃とす。肉の島あり（十一、九）

九月一日 我家の樹木

- |     |    |     |   |     |     |
|-----|----|-----|---|-----|-----|
| 檜   | 三  | 柘   | 三 | 松   | =   |
| 櫻   | 一一 | 冬青  | 三 | 高木  | 二   |
| 椿   | 八  | 夏栞  | 三 | 樺   | 一   |
| 榎   | 七  | 柿   | 三 | 柿   | 一   |
| 桐   | 七  | 一角盆 | 三 | 無花果 | 一   |
| 楓   | 六  | 榎   | 二 | 青木  | 一   |
| 高野槲 | 五  | 榎   | = | 桐   | 一   |
| 山梔子 | 五  | 枇杷  | = | 櫻   | 一   |
| 南天木 | 四  | 槐   | = | 柘榴  | 一   |
| 茶梅  | 三  | 合掌櫛 | = | 下明  | 四   |
| 楓   | 三  | 櫛   | = | 計   | 一四。 |
| 檜   | 三  | 桃   | 二 |     |     |

九月二日

大佐渡の名も無き寺のあまなる

(湯原)

蟬死して花無き杉の相な

おそ夏の本の花開く早やな

(湯原)

~~秋の紅葉~~

高知線

巨はくに自車を停まてゆく

機関車の壯さ

X

動くものを

監視めり

寂しきう湧くことを知る

X

汽車の煙

泣くなりて

その長々と

汽笛鳴らすと

聞けり

X

夾竹桃は

さりの長い花

散らぬ花

秋づく日の空

本柄の先士のなさ

X

別々のかなしは

夾竹桃咲く峠路を這り

港へ下りてつた午過

書道

白い雲の立つたあたり

夕ぐれは

白生座の動かし相

X

流脆も

秋早い花をゆま

何気なく見上げて

見えた星座の姿

X

秋になつて

始めて買った草花

泪女の命

やりやく保つたま、

X

白壁の建物

正人だ光線

秋だつた

しみじみ

眩くはれたし

X

手巾の白さ

くぬしくも秋

人由か何に期か即ち制ゆるすかかは今と去年の僕の体中の汗を考へて比較し  
て見ると、僕は燕にもなれやうし吾んをなればゆり草木にもなれり

園口ル一句

淋しきや楠の朽木の心既平

廣く寛く松の並木と鴉哉

西垣に

蟬の声しぼしとたえこる物哉

鷗鳴く港を去る夕日かな

カラカと物のつらきに坐船かな

時雨ふるや別本も去りぬ物哉

百段は四百段目の油の色

云の川に夜明け御山を下るとき

峰の杉に明星さかると夜明け

流柿の子作も悟る初秋かな

秋涼きつめまり草に夕日かな

木生の縁似みつけし秋風し

x x x

秋風

とちたまにも

こめいやくはごせらませし

手ご同、とわしうな木は

手紙を尋るくか、癖せのせります

七ふ木じの折る日記の二りけり

お天守に沈む夕陽や街も暮れ (九月三日)

田見渡すお城上のさる夕日かな

はくす扇になほも残暑かな

増田正元君の遺景を夏に取

時の忘却作業は

君と僕との思ひ出に

秋づく日の斜めを光を

射しこえてゐる

x

わかん

としてそのまゝに

僕達は歩み去り

今焦燥を感じるのは僕に付たらうか

x

長く長く汽笛を鳴らし

前の海峡をゆく汽船

ゆうぐ木はこの花壇の

かき取りの枯葉にもあつた

x

斜伏山の傾斜が

今となつては鮮やかな

我々のイラストレーンも画き出し

海は静かに光るばかり



Mein Erlöser, Jesu Christ,  
 Hilf mir, wenn mir zu helfen ist!  
 Liege ich tief im Sündenacklamn,  
 Bin ich dein Kind doch, o Gottes Lamn!

救の生 エキキント  
 御の助けは救のたまへ  
 罪の沼に落ちたるを  
 小羊の神の子羊を助け

Schütze, Herr, dies Kind zumeist,  
 Das da spielt am Strande,  
 Send' ihm deinen heil'gen Geist,  
 Ein' sie durch heilige Bande.  
 Trut ist aus Wasser und aeltlichung der Grund,  
 Aber ist fast gelblossem ihr Band,  
 Bleibt es gesetzt, leicht leben,  
 Um zien zu dir zu erbeten.  
 Mutter sitzt in tiefer Pein,  
 Weis nicht, wo es jst weilet,  
 Stort vor die Tür und ruft es hinein,  
 Antwort wird nimmer ertheilt,  
 Aber sie denkt, wo es auch ist,  
 Gottes Beistand es nimmer vermisst,

Jesus führt es in Gnaden  
 Heimwärts ohne Schaden.

蕪村句集

春之部

青柳やさ介生り里のウケの中  
 二もの梅に遅速を憂す哉  
 隈くに残る寒まや梅の花  
 燈を思ひて人あつとまや梅か宿  
 なには女や京を寒がる御宗詣  
 古寺やほろく捨るセリの中  
 公達に狐化けたり宵の春  
 さしめを足でぬぐ夜や朧月  
 指南車を胡地に引きたる霞哉  
 春雨や人住て煙壁を減る  
 物種の袋ぬらして春の雨  
 はつらまや鳥羽四塚の雑の聲  
 静かに湛えて水澄わたたしみな  
 烟いさかこまぬ雨もなくなりぬ  
 まい啼くや草の武藏の八平氏  
 春の海をわもすのたりくみちな  
 鳥打つや鳥さへ啼ぬ山かげに  
 大和路の宮もわら屋もつばのみち

井燕啼いて夜蛇を打つかみ哉  
 連歌してもいさ夜鳥羽の蛙哉  
 よますから音をまき雨や種俵  
 しのめに小兩降りる枯野哉  
 骨捨女人にしたしき董のな  
 野とともに残る地蔵のしまみ哉  
 商人と吼る犬ありももの廿化  
 やお入のまたいで過ぬ辰のそ小  
 かく入住て花と虫田か謡みな  
 なら道一や当帰畑の花一本  
 甲斐の根に雪こそかみ梨の花  
 葉の花や月は東に日は西に  
 なのはなや竹笋貝やう小風呂敷  
 草の花や分軒も空やう海苔音め  
 一夏之部  
 ころもか一印の龍買上所化二人  
 子規柵をつまむ雲間より  
 宮殿として空のたえまの牡丹な

地車といふといく牡丹哉

牡丹切て氣のおとろし夕かな

閑居鳥寺見ゆ来り林寺やち

鮎くもてふいで過行夜半の門

しのめや雲見えそくに菊の雨

三井寺や日は午にせまる若楓

絶頂の城たのもし玉若草哉

古井戸や蚊とぶ魚の立くらし

苦竹や夕日の嵯峨とまりにけり

狐火やいつこ河内の来り白田

鮎おしや彦根の城に唐かゝる

路ちえてま白にせまり暗くいはら哉

秋心いつく園にのぼんば花はげばら

五月雨や大河を前に家二軒

さみた水や佛の化を捨てに出る

蠅いとよ身を故郷にのわなを

しのめや鶴と逃をさる魚浅し

五里守りか百すなめつ夏月の

雷に小屋は焼へもて狐の化

蟬啼くや僧正坊のゆのみ時

繪圖のまも清十郎に夏あな

揚州の津も見えそめつ雲の峰

雪の山年白澤の水の園てより

飛蟻とおやふしの裾野のわらより

白掃りの元山にゆる生草さかを

秋之部

楓の葉を朗詠集のしとりかな

大文の子やあふみの空まいたいならぬ

みたこ大り啼く町三えと躍かな

柳散清水廻る處り

山はく水野はちるか泉りよ哉

まぢかゝも貝ゆる花屋を持佛堂

蘭夕狐のく水し子楠を燈む

虫啼くや河日通のわらうらん

日は斜閑屋の橋に人ほかな

庵の月まそとへは芋掘りに

甲斐の根や穂葉のう上と塩車

甲斐の承のしののけや夜半の秋

鳥羽殿へ五言騎まぐ野分哉

缺けくとも月もそくまゝ夜寒哉

冬之部

時雨ふるや鳥の渡り今の上

初冬やゆれんなりし京はづれ

枇杷の鳥もすなめつわらくたれり

春の花や石をさめりて路を取

狐火や脚絆ん雨をさすならん

早梅や師堂の里の雪屋敷

たんぼほのさか花より路り原相

ふさふさの十鳥食ひぬる梅野哉

子と捨つて敷きたくて梅野哉

甘草おとて狐の足跡を遺りけり

狐火の燃えつてはなり梅野哉

草餅ととるん月の入る梅野哉

さかろしや何れせわたるは五粒

此をけり衣をさりと思ふけり

又をちやちやの玉をさす梅野哉

鳥の水いゆかみ流るる雪をさす

梅野哉の月と清とさる水なり

梅野哉のまよ木はらや冬月

由緒とてそり枝出さぬ梅野哉

寺堂の梅はみまはす梅野哉

蟬の啼く音がしきり

九月五日夜 伊藤氏方

眠れどし寝の 朝の 不とうきと目覚。小て、ことこのま息をきこむ感せり  
本手し跳かすこの生息を生命を耐らすとくたらしくなる  
生息くなつてこれる月身を用は 無所畏の心は 無二つらん  
一夜中に口笛吹く音長くつくと 向ましか、大も口笛吹く音か

九月六日 清徳保男 友と直久修

飽和の 状態にある大気を 擾す風 吹りてまつまのなつばら  
嵐の先 弛はけしまたちをひきもえさなる 嵐の 去らまにあり  
百日草の 朱の色も 山嵐の 前の 青い大気にも 凄く 研えり

九月七日 宝塚 京阪商會 一三

野	小林	勝	竹	田	勢	徳	延
門	小	川	小	田	能	清	吉
二	8	9	1	8	8	3	7
三	7	5	3	8	2	9	8
四	6	3	8	2	7	9	7
五	8	5	8	2	7	9	7
六	8	5	8	2	7	9	7
七	8	5	8	2	7	9	7
八	8	5	8	2	7	9	7
九	8	5	8	2	7	9	7

ミス日本 草壇をこす

日や当るなから 斜面を 持つ山の ぬぐる 林場の 空は 澄みたり  
雲火する 雲の子 あり 空青く とんぼ ころころ ころころ  
種子を かりし 待宵草の 野の 原に いる 啼く 虫を なま せしめる  
川原に ともぎ 豊なり 石白し 鮎の ぼりつ、 凍らるるらむ

堀田正元

一年を みのりしと きはむ オニや けく ありし 君だに 見えむもの  
あふらせ ます 女官ら の まん 中へ 珠を 手にし 去年の いま ころ  
秋風 に みた 入る 白く ぼら の 木ま 外へ おも ちは 今も 目た あり

向謀 X27 (DISS HONORED)

D. JOSEF Sternerberg  
X27 MARLENE DIETRICH  
KLANOV VICTOR MCRAGREN  
九月八日 公野屋 屋崎忠彦君

刑場。装ひは成りて 雪深し 足音重く 兵等 中まけり  
悲しくも 石壁に びく 凍の 音に 二ん びたる 稚い も ありき  
あつ朝 雪深き 獄庭に 倒れし 女も 数多く なり 戦は 止り  
泣く ならぬ まか ちみだ の あり、 見る べし びる べし びる べし  
おのづから せいの ちか せいに とも せし まい する こと ありぬ  
わは ぼろ ぼろ けいの 計に ありて 口惜しくも 涙を せり ままに 悲しく  
はる ぼろ ぼろ 音樂の 由 あり まる 牢獄に ありて 睡の あり

かたわきを みる ころ せし 十人の 若き 兵士は 物も ぬの しんか  
すなほに 泣き けい せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに  
せん なまき 自嘲に 東洋の 白磁の 壺 破りて 見て 更に 悲しき  
冷めた 約 せいに せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに  
あまり 泣き けい せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに  
いとりて 行く 途に 行く 人の 生活と 持つ 人た ことの 結果と 知る

とも せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに  
とも せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに  
戸外には 持 照燈の 支え ありし せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに  
たは ぬの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに  
あつ ぼろ ぼろ ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに 泣き けい せいの ちか せいに



わがふるま 樹影は

やうにうつるきりのなをうつろふこころをうらむをいふ  
こころしつるきりのうやわしにうらむをいふ ぼんやりとてけ  
しよんぼの影の園のまをうらむをいふをいふとていふ

青林のまをうらむをいふをいふをいふ

まをうらむをいふをいふをいふをいふ

奥の院の禪寺通はる路もよみ

鹿鳴けよいつく丹波げ山のころ

十三の 西垣氏と

青い鳥のふりしり、↓ 観音神社 ↓ 太夫寺 ↓ 隆寺 ↓ 山嵐の太夫園 ↓

↓ 虚空蔵菩薩院 ↓ 松尾神社 ↓ 梅宮神社 ↓ 嵯峨の禪寺 ↓ 清涼寺 ↓

↓ 大覚寺 ↓ 車折神社

、 隆寺の禪寺菩薩院

しよんぼの影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

ぼんやりとてけしよんぼの影の園のまをうらむをいふをいふ

樹影は

松の影にまをうらむをいふをいふをいふ

いふをいふをいふをいふをいふをいふ

かみんの影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

名所のまをうらむをいふをいふをいふをいふ

かみんの影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

空のまをうらむをいふをいふをいふをいふ

まをうらむをいふをいふをいふをいふ

嵯峨天宮寺

林の水の池の木の茂りあふし本深く水はあふりかたうつ、  
水よりの影の園のまをうらむをいふをいふをいふ  
しよんぼの影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

清涼寺

西の院の影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

樓内の影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

子守の影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

上京都を去る 十の夜

植物園 其地

かたの影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

まをうらむをいふをいふをいふをいふ

百の江豆の影の園のまをうらむをいふをいふをいふ

西唐人はとつてのまをうらむをいふをいふをいふ

治北の川

下ん家建ちたるまをうらむをいふをいふをいふ

茶人となり枯木しを命も終るまをうらむをいふをいふ

まをうらむをいふをいふをいふをいふ

世帯水相逢

地帯よまわりのまをうらむをいふをいふをいふ

まをうらむをいふをいふをいふをいふ

別れをいふをいふをいふをいふをいふ

民国の歴史研究といふ君は其を世をいふをいふをいふ

茅ヶ崎の朝風海は松の上に見えたり花吹雪は

大いなる朝風といつは木々を民国人見つ

豊和の名知らぬ山に雪のちばまうしははににらんらむ

あは木々を朝の稲田はなり木の人をて見ゆるの甚むけし

X 松田の地は下極まるる世に一松のみ平一海あり

さびしきやうでしに庭のこころにも力なすまやさなりなりや

わすれしもの正しきものも田をたぬこのころは故をも清く

つりまゝ宿に一木の空のこころを掛ちしをかりぬなしまこころ

十六日 無事

秋雨は一日の紅の屋に降るとは見えず外はあはは雨のぬ

杉林に音なくしよき由よりぬとこはまとなまぬ花はすく

むかしむかし江戸の屋敷もすくぬぬ文はや作未移り

むかしむかし白壁をたしす町なるてわのぬぬ文はや作未移り

むかしむかし南招まし昔思はず神座よりつらん昔の静か

南東は子侯士の世にとももあは神座はとほくやつ

まじらん不意叩きまゝなるま人のちばわも終つて

十七日 新雨

わの子らやあつたのもん夫を湯こつておれぬわは泣き

わらりのすりすりつくりわらわらしそのまはまの夜は何を思は

X

さびしきものを見しは花にさかたりなまのこころとめしは

とさしきものこころをさかたりて、又合せむを思はぬ

X

おぼほしく内空はくもナリ中をまじりぬぬ激せやわつは見え

すたれたる狗橋さあをさうさうとわらしらるるすべりに風は吹

X

嫉妬といふこころ

まをせんとまじりし海ぬもつ

自らは恥ぢるを感ひて

何とも為やしもなし

全身を熱くする。ぼんちつ

人は木をさけすめる月もさ

殊に勝利者の月

嫉妬する人も死なぬといふ

故にわわわはらるる

備へたる眼もさうさうと

物の隅より涙ぬ

大ましく息を吐いて悲しく

蒼暗き洞穴に隠れし

X

はなは葉やみでわしをささぐる

X

ゆるやまの物も人をいれけりまににみいみい

板面をけりつけやうとも一こころの人のわなを

十八日 壬午年三月廿一日 保田村  
十九日 壬午年三月廿二日 保田村

かなしきは宮々とわんらゑまたる格也庫破壊の車陣を飛行機  
さすみの眼もこわえと見えぬた。車陣とこの七姉せむいませ  
車陣の神気はなる奴輩に民間の煙草をぶつけけるべし  
この日頃にくみ見たりし車陣人地陵に屯しゆく境けりんや  
黄沙飛ぬわんら御土へ入りまじ銃砲の穂を内より車陣人

車陣兵らうは吹まつ、まじけり牛車藏めよ本陣のるゑ  
車陣兵の銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
車陣兵の牧は入り、車陣兵銃砲の穂をよまてりあはる  
まじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

わんら、あふまはるん二ふいこの口吹切りあはるんまなしも  
かゝ然と銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
りろしし、あふまはるん二ふいこの口吹切りあはるんまなしも  
むくよあはるん二ふいこの口吹切りあはるんまなしも

このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
このまじけり、と見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

早明 六A一五 明勝  
愛止 二回 三。立教勝

二十一日 早明三回 六。明大勝  
十一時半頃 地震あり 向う向原先河三番地 下宿まで震え渡り

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫  
地震ありと見えぬた銃砲の穂は走りたりや地陣までなし国庫

赤き眼をせと子ともとならぬ  
ものト杯が早く本弁り易き

あ <sup>x</sup>  
おぼろげなる

秋のも中の月かげに

かすまにもまみは信りたま

まこと <sup>ふ</sup>まなまわんにもあま

月の照ちす木々の葉も

なほ女倉おめとのまて

終に白き手い <sup>サ</sup>たぬにも

觸ん <sup>サ</sup>ズリける

などわんは <sup>x</sup>まゐるかな

まみと

まことわんが

心うはしく <sup>x</sup>眉清き

この世の申なる

花のせし

わんは <sup>x</sup>禮禮を下げて

船 <sup>サ</sup>髪天を <sup>サ</sup>とまよ

かたぬの <sup>サ</sup>群るも

松田明氏 伊田子太郎氏

二十六日 西康問題を

三十七日 早帝戦十一三 帝大勝

わたる日は雲の流らぬ向にありぬ <sup>サ</sup>在更ける月の如くは欠ける

まゐるまに日 <sup>サ</sup>仰ましが <sup>サ</sup>眼くらま <sup>サ</sup>地は <sup>サ</sup>ハゲリ <sup>サ</sup>となり <sup>サ</sup>に <sup>サ</sup>ケリ

白 <sup>サ</sup>比 <sup>サ</sup>年 <sup>サ</sup>微 <sup>サ</sup>花 <sup>サ</sup>を <sup>サ</sup>哀 <sup>サ</sup>こ <sup>サ</sup>秋 <sup>サ</sup>尚 <sup>サ</sup>早 <sup>サ</sup>き <sup>サ</sup>ま <sup>サ</sup>り <sup>サ</sup>ま <sup>サ</sup>空 <sup>サ</sup>に <sup>サ</sup>富 <sup>サ</sup>田 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>方 <sup>サ</sup>由 <sup>サ</sup>云 <sup>サ</sup>旋 <sup>サ</sup>る

雲のぐる <sup>サ</sup>武 <sup>サ</sup>藏 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>江 <sup>サ</sup>戸 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>さ <sup>サ</sup>す <sup>サ</sup>べ <sup>サ</sup>り <sup>サ</sup>秋 <sup>サ</sup>を <sup>サ</sup>十 <sup>サ</sup>ば <sup>サ</sup>お <sup>サ</sup>と <sup>サ</sup>ろ <sup>サ</sup>ふ <sup>サ</sup>も <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>か <sup>サ</sup>ま <sup>サ</sup>な <sup>サ</sup>に <sup>サ</sup>見 <sup>サ</sup>え <sup>サ</sup>つ <sup>サ</sup>つ

二十八日

夕 <sup>サ</sup>い <sup>サ</sup>て <sup>サ</sup>く <sup>サ</sup>水 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>に <sup>サ</sup>る <sup>サ</sup>不 <sup>サ</sup>二 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>山

いつ <sup>サ</sup>ま <sup>サ</sup>でも <sup>サ</sup>い <sup>サ</sup>つ <sup>サ</sup>ま <sup>サ</sup>る <sup>サ</sup>も <sup>サ</sup>西 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>穴 <sup>サ</sup>に <sup>サ</sup>に

何 <sup>サ</sup>か <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>女 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>子 <sup>サ</sup>を <sup>サ</sup>思 <sup>サ</sup>や <sup>サ</sup>て <sup>サ</sup>る <sup>サ</sup>夕 <sup>サ</sup>い <sup>サ</sup>れ

淡 <sup>サ</sup>青 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>空 <sup>サ</sup>に

煙 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>ぼ <sup>サ</sup>く <sup>サ</sup>す <sup>サ</sup>煙 <sup>サ</sup>空 <sup>サ</sup>が <sup>サ</sup>あり

雑 <sup>サ</sup>音 <sup>サ</sup>を <sup>サ</sup>刻 <sup>サ</sup>み <sup>サ</sup>こ

汽 <sup>サ</sup>車 <sup>サ</sup>が <sup>サ</sup>あり

女 <sup>サ</sup>倉 <sup>サ</sup>が <sup>サ</sup>注 <sup>サ</sup>と <sup>サ</sup>ん <sup>サ</sup>か <sup>サ</sup>る <sup>サ</sup>地 <sup>サ</sup>は

わん <sup>サ</sup>は

夕 <sup>サ</sup>い <sup>サ</sup>れ <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>い <sup>サ</sup>つ <sup>サ</sup>も <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>心 <sup>サ</sup>取 <sup>サ</sup>し <sup>サ</sup>ま <sup>サ</sup>に

屋 <sup>サ</sup>根 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>形 <sup>サ</sup>を <sup>サ</sup>した <sup>サ</sup>富 <sup>サ</sup>田 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>山 <sup>サ</sup>を

眺 <sup>サ</sup>め <sup>サ</sup>つ <sup>サ</sup>つ

中 <sup>サ</sup>央 <sup>サ</sup>線 <sup>サ</sup>の <sup>サ</sup>驛 <sup>サ</sup>に

煙 <sup>サ</sup>草 <sup>サ</sup>を <sup>サ</sup>く <sup>サ</sup>ゆ <sup>サ</sup>ら <sup>サ</sup>す



二十九日 X

銀杏の實く落ちる

午過ぎの大風

雲はゆまめぐり疾し疾し

西空はや、開けて

は、青き空の地

やめて銀杏の實々の見ゆ

VAGINAに似ると

清徳は田のかまよひ

云はなむか

三十日 東洋史学会

ひえひえとくわがるさらば身は汗の気味するりと下るさ水につ

時計塔のくわのこる空はさかざかしゆる樹はかなしと思ひ

ぎんなんの樹の下をとりゆるく木の帝都のこるにかへらなわれ

お茶の水の谷間はあらし神田川流んつ見時生計曲じと

可なり止むと思ひ止のよとよは木菊賣る街を帰りまわつ

いすくもる空まどがものありにけりガスタリに人あがりてゐたり

いつもいそがしの頃おそれにし、いまおそるる夕ぐれのこころ

X

秋來らばのつとま野丘に

探りて園見せむすらむ

あゝ女君ははと暮る木かゝる地平にのぼる

夕月も、さうりさうりと消え光る

夕づ美もあふ、穂芒は音に

いろもこめなむくべし

ま逆を領はなほも暮る木のこり

淋しき夕の物の音を

つれなく反こが響おしとよもさな

わふたの口笛も。

一日

上念のおきんと狼から

本宗君逮捕す木たこの噂あり

二日

同窓の会、暖道のそと、な

もう怖ぢの眼の光弱きまじらあつちやわき物の云々

するといけんは、若けん木ばわんこ、一、存はずかのかたまりはやすまにあうじ

三年の筆のあまに、革命の朝を、霧らぬよはまこか

か、さるる、逃れららしい、山はたし、捕り、た久保ま、心

連行末を柳

渾身は丸まてゐる、松田と三人はあし

三日

奥澤九品佛

九品佛は念々と光つて

花弁式

白い指をかついで

梅の木花蔭で泣いてゐるお母娘

x

果敢なまものこまじき

わんはほうほとちくはこー

る日百十の如ん立つ

とべとんば 秋なれば

x

をみなごころあまりに

わん中の伊豆の大鳥の

わたりゆき 燃ゆる山見む

秋のえん

x

橋つ昔まのや思みつ、秋のあき朝の泉のあたりしつけし

x 童歌未結ん

さるすべり本村とてさくをんばほそぼそのはん 秋うけおりは

そらう高く啼きまつ、鳥のゆくえん人焼くけむもそこまて白す

東山は白原となりて、ゆくりなく人燃えるたるひる にはありけり

とんじりはこのま原にもありにけり花サリはいましてつみに本たたる

x

かなしまいとみるとましく人々まもらんてゆく物の言を 詳に

梅の橋のこむるに鳴まし鳥ちうきニイもこのくなくやのわんは

なくし妻のゆかしわんばるる江江まもとゆく花をりも遠く人やうてせんなま

るのみ

x

恩師財津愛象先生 胃逝考

七日告別式あり 遙に拝す

温容永久と帰らぬ

秋の雨ふるやわたりに枯落葉

柿みる山田に花散りのほん

しづしづとゆく花散りも華散るもり

熱言をりとなりて冷き雲

林に生してぬきまくりのサ落葉のな

大空のころに黄葉するこ甲し

反動の嵐吹きまじれがなれば

スライは 風存るひとなり

今崎忠と元は故所んまらむ

八日 丸 三郎 松田明 明とワールをみに

九日

年月一

そんは灰色の髪のも

おぼれた手とをます。

要の音ある 嘲笑

として墓穴

メッセ

富士の見える 今日

雨か晴木てカラとした空

海をー 長くはつらなすつたが



**財津愛象氏** 【大阪】  
 徳島主任教授兼大阪高等学校講師  
 大阪市住吉區住吉町三四七番五位  
 勲六等文藝主財津愛象氏は急性腎  
 臓炎で大阪市民病院に入院、尿毒  
 症を併發、四月十日十時廿二分永  
 眠した、享年四十七、氏は熊本縣  
 士族、廣島高等師範卒業後京大に  
 入り支那文學支那語門を専攻卒業  
 後熊本縣玉名中學校教諭その他要  
 職、第五高等  
 學校の教授を  
 經大阪高等教  
 授となり昭和  
 四年本官を就  
 し、徳島主任  
 教授、大阪高等學校講師として今  
 日にいたつた、急性腎臓炎高熱の土  
 で育英事業に功績あり、また外務  
 省文化事業部の補助を得て十三經  
 注疏索引編、事業の一部を擔當し  
 致々として勵んでゐた告別式は七  
 日午後三時半懷徳會で執行

十日 薄井敏夫君 水部がまは

新井道平師

時雨や木立の葉を吹く

秋 秋こそすのた花難し

海軍に生るる見ありや

カールのヨハナとちよる文

ヨハナ、ヨハナ 汝の眼はリウのひげの安らうも青いヨハナは汝のくちびるの

紅とも果物の切り口にたとふヨハナは髪はタリリヤエリも輝きまき

沈む日すらも金であるヨハナは木の陰は枯草の白ひまらもすかしく銀香

の息もよも好ましいヨハナは汝の乳方は無花果の葉っぱのにはほいさう

觸ると薄若もまつく僕の皮と膚を刺して僕は欲求で飛上こころ

ヨハナおまの手はとがげの指すらも軟く自由自在で海星の觸手すらも魅力

があるヨハナおまの足はばらもへんの根うも相かなくこぼのやうな爪を

一つ見るとおまの神妙子思はれ有教いヨハナおまの巻毛は車那の棕櫚

の葉すらも高麗の如き殿座のあることを示すヨハナおまの耳はひやま

すやまま一七の雪の中を歩く一群のうすたはヨハナおま一の言葉は銀

の連るの鈴なりおまの如く四辺のものといふを告げ鳴らす七緒の念いヨハナ

としてお前の便りもけはわかしを悲しませ懐ませる重の魔の手も如

十一日 ぼろを写ししEFT XE 一冊の

十三日 生島山平治を来訪

十四日 大島、信田、龍崎、紅松、杉浦、中島、山崎

帝立電戦 二一

富士の山頂へ走れる雲はのりやまの木をこく久しくてゐる

フニのわん、木を雲は動の下の街の電車わさし

高層ビルとびまわすフニのわんをよ一半野の人肉の常の

伊豆の海を起れる雲はつらつらと走りゆく、動く哉、龍崎をめぐり

はるかなる國會議事堂にさす光りゆく光りまひるとなれり

宮城の松山の雲を巻く長々とすまひの煙

終文の武甲の山に雲の山と、はらはな木ぬのをなし

遠をまよひ起る雲の群人肉とあるをさしみつゝ見

銀まの結ゆるかす風をよアハルーンも康あせし

海へ行く風は気味はなひまお洲のあたり舟は見え

はるかにく光れる海に巨なる街の煙は御垂れ

十五日 帝立電戦

この國書館前を走る大人は泳ぎをき

夕方九時半と神字花を敬

ゆり月はなごの西へ下りくそこはなを本庫の香も

ゆりもやはなきてせにかうしけり水木をい

したの暖く園いよみ入り秋をまきりとをなはかなしみかた

ち、は、の、く、き、も、た、り、時、た、け、の、草、草、の、う、ち、は、か、ら、さ、ら、ま、

ゆり七半ばしきみ支りゆく雲にまきれおあは見え

流けれはゆく人の見えをな

みか、く、こ、す、ま、ゆ、く、水、た、の、時、も

十六日 無為 松浦とて 保田と  
十七日 早慶二回戦 國系を穿た  
十八日 雨申上

同 二一 早慶

永遠の女悦は

モナリサにこのをさす

かすかには、笑みものを云はず

右手には此きの花をつみ

左手には幼児の手を握り

母悦と羨んみす、愛のあかぬ

改定をこのよかその長めい

眼も揺るはしない

此後には伊太利垂の空が蒼々として広がり

野草のほくを越えては

光の湖を見え、揺るる樹は

空をこりてぬ

モナリサは永遠の女悦で

やさしいやさしい僕の二人であつた

x

世に城自蕭索

おのつらさかしまものか

萬見山河空

山河も空とてむむものなの

天高秋日迥

古き城あとしま秋をなば

啼喚聞歸鴻

さうなるく日はやまぬり

中言臨顔故宮

その三

柵が白く

かすかな白に

こは静かな草茎地

上田敏先生も眠つてゐる

おかし人は

のんきだったよ

その四

けふ始つて

大川を東に渡り

叫喚する機械の音をき、

浮動する煙の團りを見た

そよそよ一銭芝居汽灯のりにゆく

ぼんぼんと立をたて、

船かやをまよと

毒消し壺りの女が下りた

娼婦の下りん

女衛も下りた

僕達はその橋に乘つて

川を西に渡り

芝居を見に行つた

(四日)

寒塘映衰草  
高館落疎桐  
臨此歲方晏  
顧景詠悲翁  
故人不可見  
寂寞平林東

王維

十九日

しめを眼下の街の屋根瓦ゆつて光る秋雨の日は  
大なる懐ちてゐる耳の上野の鐘は通ひ来りぬ  
銀もも落さうしけを秋雨のしめを降り冷を手足  
あなつめたきまけの手足と空のりゆなほほいと去へよわなことをあは  
幼な妻と秋雨のよゝはわすのりゆのきこえかた山

x x

嘆けとて片われ月はおかきめかの川山平ん水よせぬむか  
あきらけく川面んゆらぐ光あり 瀬音に考むれなくはこほろぞ  
月かね川上の山おほろめき川堤やう 詠ままの足ゆ  
川兩岸はわたのほぶらの林まわりゆりまつゆ月んあふも  
わかましまみかふささむか々々直そゆらし月んあふもこのあふも  
そみはさしむさあま一とらばにはんなくおしはせつなきわなのさあふも  
ねん立て、こぞ啼くも同け

x

幽けそ先に燃えて草達の輪舞

竹の中はこしなむわめ。

植物質の醗酵。水分は露となり

月光をまじりてまらぞ。

今をなすすましても 決りぬ

い葡萄をたか尻にうけてこのやう

外套の破れをのせう

いやはや何たるていせうくー

頭の長いふざいせんかたろくや

夜は長いし 腹はくちりし

土ちもろくー 一おどり 一おどり

あまのち人 <sup>と</sup>あまのち人

一しん三郎のいまごころか

月の光の下をさまよふ

収穫は佳しい野なまーろついで

山茶花の紙居のねんねい

あゝ <sup>漆</sup> 漆のまみぢの草

秋はなつこほへえんで 僕と君

今では百里の山川をへて

仙臺の故きも ぼろをければ

一月あふりして一しん

せめておもひなふの 人ももめて

たらいソフ帽の下をうらをえらせよ

十月二十一日 (取太郎の護身會を閉じくんと山鉄湯子上呼いかけ)

取太郎は一九三二年十月二十一日の夜半の宿舎に三つやのせなままに一九三〇年十

一月二十五日の事件—と本を當り起ちなかつた話として前半を記した—を記す。

元より一年に近き時は或部令を除く外は記憶を甚だしくすべし。記事も流れて

不正確なものである。事件の中心近くまで積むことを見入らした事には於て取太郎

の記事も又後世に残すべきである。護身會の心算を諒せよう。

取十月廿六日午後四時、林仙の解客、誠意なきを認め、今後の行動を固めて

のうらみの態度をせよとめん一矢の解客するをいした。この際合宿所を二重の連絡を

自らを出すこと、片甚だ統制あるやり方であった。取太郎らの文三三は客の合

所棲上であつた。これは客中のあつたころで、<sup>舟の</sup>舟の船にあらわらんをいれたら

是れとも中はならぬ。併し乍ら二先視三甲七令部は前日既にスライキ甚だ

驚愕の行動一切を否定し令部(松山、<sup>後藤</sup>後藤)の先達大倉んかばらなかつたの

ち、又文三は取太郎らの後輩である。藤原一流も同様な態度で之も及ばず半

ばともな。かくて連絡甚だしく甚だしく逃れぬとあらうの席終らり三四名を去

し、以て中央部との連絡を計るをいした。二中央部たるや、まは僕等理事人よあつ

たは後判判した。これこそスライキの如く大なる因に、これ又取太郎ら文

三つうらみの取部者、任であらねばならぬ。由連の連絡をせよとせしめばはし

殊に、帝昭の始りせしまを成結優まのものを計り、大の目をどう外事

を知らねば統制上の欠陥のせしめも計り難い。二、三、せん、せん、備隊も、ち

成、せん、隊長として文三三の川本、あつた。川本はスライキに對する態度は、はつきりせ

かりしも隊長としては中々功があらう。甚だ備隊は各處の技術をまきり、を聞いて

馳せよする女長、達の心算をなかり、事情を諒せしめる。まゝあるか、徒らに面會を計

絶する計りで、ち、ち、は、女、女、連、感、である。然し、これ、も、な、り、か、ら、め、を、後、に、計、す、を、



と云ふ取太郎の噂と。取太郎も愛する女の外に出る。こし概内(南)下りて

人と指したる如き。遂に正内(南)前より命を以てし。酒を帯ひて老

神まで去る。取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

は、いかに公金の席を弁を振。こゝを流し。中野は、こゝを流し。こゝを流し。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。

と云う。昔は、取太郎は内かんとて、酒を以てして、老神まで去る。





煙官に火つけしを  
遠國にまつ西云ひとつ。

情癒の後、浅岡の岳は見えすけり  
竹林に寒月、さり夜鳴る鳥

下月廿五日 日曜 石神井池へ

ゆげばゆげばむさしのくはの大根の畑さみしく日は下るなり  
くちなはのみたるはべり 秋の萩の花にんほな、はり  
若たて流るる水に草生れぬ 河骨の花一つあやも  
る菜畑とよよの丘の向ふ側家あり 何れも紅葉つる 榎地  
山茶花咲くみづの塚にたどり山茶花見れば 秋の止ま  
大根の青葉のいろにニろひかぬなくあやめく その葉の青に  
森のいろ 畑のすみは森まわしてニにくたさ 秋のうら日は  
とほく鳴る汽笛の音は聞えまぬ 本林とみるはむらさましき  
この此の空つげし 榎の傍にひとり 何れもゆきし 名知らぬとま  
石神の祠に坐るみち細しくちなは遊びかたに見らんつ  
石神の森をつくる杉の榎のかり葉くろし 冬は木向ふ  
大根の畑のみち 日はのけりかうたしと思ふ わかぬあつた  
あつたの 河内の野をゆきゆきは 二つしま人の門たふす

十月廿八日 日曜 石神井池へ  
Madame de Shun Kachimari

あつたの 榎の傍にひとり 何れもゆきし 名知らぬとま

石神の祠に坐るみち細しくちなは遊びかたに見らんつ

あつたの 河内の野をゆきゆきは 二つしま人の門たふす

あつたの 榎の傍にひとり 何れもゆきし 名知らぬとま

あつたの 石神の祠に坐るみち細しくちなは遊びかたに見らんつ

あつたの 河内の野をゆきゆきは 二つしま人の門たふす

あつたの 榎の傍にひとり 何れもゆきし 名知らぬとま

あつたの 石神の祠に坐るみち細しくちなは遊びかたに見らんつ

あつたの 河内の野をゆきゆきは 二つしま人の門たふす

あつたの 榎の傍にひとり 何れもゆきし 名知らぬとま

あつたの 石神の祠に坐るみち細しくちなは遊びかたに見らんつ

あつたの 河内の野をゆきゆきは 二つしま人の門たふす

あつたの 榎の傍にひとり 何れもゆきし 名知らぬとま

あつたの 石神の祠に坐るみち細しくちなは遊びかたに見らんつ

あつたの 河内の野をゆきゆきは 二つしま人の門たふす

あつたの 榎の傍にひとり 何れもゆきし 名知らぬとま

あつたの 石神の祠に坐るみち細しくちなは遊びかたに見らんつ

あつたの 河内の野をゆきゆきは 二つしま人の門たふす

あつたの 榎の傍にひとり 何れもゆきし 名知らぬとま

山見は石ふむ坂の野菊を

僕は何か泣きまじりになつて味來人の本御通りを行きます

春の風の僕はしうとつオトを吹きまくり

僕の細い足はむむしの上まらもよく見えませす

向ふまゝまゝのせの子に恥しいので僕はして自とさとまくりために

いそびます

女の子は怪訝さうに通ります

あゝもいふ言はつきました ニごも僕は昨日今も弱味をまくすために

おせ時とあまのわはちりません

僕は悲劇俳優はてよくしやべり

悲劇俳優の様に表情をたします

さつとよあけの十二時

時、ら言をさつとつ、丁ししと眠に入らば

こころの(て、ししひらむ

見えなせむにききまうきいとやあす

けしきもたぬ人やあす

今にの泣きつゝるせりけり 雲も切あめまひの時

右に水に北ののりや 緋を浮せつゝもいしめる

鯛もつまじの時ありて 土ほりうげなく 拒まかて

わけ(知らばとあつても その巨匠なる 眼を閉す

水の外なる雲みあけに上るるとさびしく

x

つばあきや土かしまいりこそいふべし

つばあきの藍のすめたや水の上

x

まろねしてあそびの言やの言の向きめ

ま冬こそ鉄もつけなむを空をまこ

動むる蝶 欠つけたる 土をまこ

今年柿がうでく木々々々りあし

x

秋風や土野をめぐるとく木々

菊の香ややせむの家の欲とあは

十有二十九日 小石川植物園

叢林の一もと高き青樹をり鳥まこむ木とひ又とあり

叢林に赤ま空つけし一もその木の名見てまぬ今はまぬし

まるめるは目立ずその空につるたり 湖斯たんきうれのとれとまらわつ

まるめるは 沙塵よりまり車に轉る 藁つくりぬる

わかぬらせまるし時に甘き諸つくりし昆陽花の碑はあつたし

いゝいゝか 動物の檻のまぬまぬ 小鳥ら鳴きまわすをみおさるる

猿の木の枝しまわむ欠こゝたり 人向う身はなむをさし

銀すいまかやまそう 標をみせり 富士欠えぬ空はあの上へまぬ

いんちとあそびのまぬと下にしつみあそむる 空はわはちり

十月三日 幸宮清を丸の風和を舞上

さやさやと音をいふくまの種をまきせし草丘に日はあつまなり  
草丘にのすむこ草刈りしと入りぬすくまのしげりあらしと云は  
中しは鳴きまつゝあたり野の凹地に紅葉つる橋は圓りしめ  
風和いまで飯てゐる丸の声たし柿もちゆまて合はしめにサリ  
兄貴のあけけのはかきからぬ遊ひゆけと弟をなげ言はりたまし

十月三日 雪を千代治へ送別(會)

昔々 はんくまも憎しなつあし

十一日

上方尾山に去る 池内、宏博士

浅川一尾尾り一佛峠一 櫻殿

たなをける群山はあまのじの上の宮田そのなる殿は相<sup>てん</sup>の

丹澤の群山はあまのじの上の宮田そのなる殿は相<sup>てん</sup>の

丹澤のしげき山群をゆく空に、戈島まじり立ててしげくはあ

相模灘くもりを光らぬ海をくま江の島を師に教へまぬらす

x

北面とちりかけの紅葉松の林をけり秋深まなす

紅葉松の林をけり紅葉松の林をけり秋深まなす

紅葉松の林をけり紅葉松の林をけり秋深まなす

紅葉松の林をけり紅葉松の林をけり秋深まなす

x

川のせせらぎをききやうたまやうに紅葉をまじり師の言はあり

夕に木を伐り断り下り立ちの子供をいそいで採りておめ

夕に木を伐り断り下り立ちの子供をいそいで採りておめ

夕に木を伐り断り下り立ちの子供をいそいで採りておめ

夕に木を伐り断り下り立ちの子供をいそいで採りておめ

夕に木を伐り断り下り立ちの子供をいそいで採りておめ

夕に木を伐り断り下り立ちの子供をいそいで採りておめ

夕に木を伐り断り下り立ちの子供をいそいで採りておめ

x

上方尾山の山頂の上におりて又甲武信の岳に何時雪ふらふ

上方尾山の山頂の上におりて又甲武信の岳に何時雪ふらふ

上方尾山の山頂の上におりて又甲武信の岳に何時雪ふらふ

上方尾山の山頂の上におりて又甲武信の岳に何時雪ふらふ

上方尾山の山頂の上におりて又甲武信の岳に何時雪ふらふ

上方尾山の山頂の上におりて又甲武信の岳に何時雪ふらふ

十一月五日 薄井君トアテネつるセ

十一月七日 革命の記念日

大デモ

大デモの毛を引つばいを横車とて行つた兄弟

x

文有藤茂吉の信濃野の飛は

ぼくをまきばしめ

とて同様の

言を結ぶ附いた醜い学校組織が

ぼくを横らしめる

あゝこの時代に

輝く嵐の眼を以て持った其人が

髪を握りて一耳を引はらして

引ずらしてゆくことこそを容認せよか

ぼくの感傷は幼げな

資本主義社会の断末魔の響を

冷く看過せる人はなりはな

兄弟の傲然とをわゆる暗塔の

内部に於ける黙の果敢たる時代を

増しを以て語り合ふ日 過も去つたこととして

語り目 一と本は僕もフビキリパートの社会がある

FLEUR DU MAL

一帯の華

と本は東漸と咲くものではない

いんなほの漸とも

美しい島文殊の華を咲かせる

と本は資本主義社会機構の矛盾の

現は本

毒々しい色はありながら

人と一帯をさしめる色はな

赤い華は咲くこと

その基をなした華はも早見の鳥の

地下に膨れた球根は

昔種を土集りて本を育み

と本を咲くメニエの花

暴力の花 独占の花 独裁の花

凡ゆる反感をこころ花に感じ

こころをなすわかれは野の路を

十一の月 保田 一層のうらみ

十一の月 紅葉の体と

日本の紅葉の樹々をわが悲しみの水かき 秋深きとき

は木の樹の葉をすくれば 秋の静けさし 静けさし 静けさし

はかなや 秋の草原にむかふはせのまじりな

わかれをさすわかれのわかれはなるものか なるものか

まり 降りるものは田の白を 白を 白を 白を

東山の上を啼く鳥に 糸を 糸を 糸を 糸を

杉林に 友送り 友送り 友送り 友送り

と本は東に昇りあがり 昇りあがり 昇りあがり

杉林の陣に 一帯の 一帯の 一帯の 一帯の

木が 木が 木が 木が

おろけくも 甚なる 甚なる 甚なる 甚なる

落葉焚く白くは流氷まらけりわさけまがらこのしるけさは  
 一鳥は捕にちて啼きぬしが世の散るくはに能く去りにけり  
 秋のつゝ野にふるふふ大郡嘯小はゆべり煙はまきけり

十一月十二日

朝なればと見探だる山羊の檻来てわびみるやぎりみほとも  
 学内の樹々のつらゆ様見ればいす散る葉ありかまなかに  
 楡の木よりうらふ木は散るおそすのみにたえおはたふぬ身は  
 楡の樹はいつかすかかし朝の肉の骨にちりこむ何の木も葉をか  
 ものぶとのするまじく朝をみて林泉おどく鯉赤しと見んぞり

X

くんばこし帰りみちゆき鳥光の空に林の樹散りしを  
 雲霧のまじみの河に身を思ひつゝひるげを食むにひりひるげを

X

時に見ておとまどうまめはせ紅葉木こゝ紅さをばいつか見たりき  
 初子のわんたりしときこの紅の帽子ふるふ著しんちりけか

中野東治の云々如くわんらはあすなものをのすなちものごと追ひすぎ

けんどもわんちりの教を月(何とわんちり)はこゝ以上のものを作しめぬのだ

十一月十七日

きり雨にけふるニコライ堂見ゆるお冬の氷はしをけふも澄りつ  
 きり雨に下るせんぬ気体ちりけり(電車中まきのとをたえにけり

X. モロコシとふ穴 津田

桜樹の樹やいとを明る雲試ま。

きり雨にけふるせんぬ気体ちりけり(電車中まきのとをたえにけり

X 本御通

女人受胎の型けふも若にさらま  
 まことそのせ陰さししをうめなり

X わん

わんは鯨の牙なりわんは荊の棘を

わんは琢木鳥の此角なり

X また

わんは水晶なりわんはぬしけんは

なしくもなしまかな

X おま

おまはわん認識の外に立つ第四次元界

之にあらわぬ像も如何なる像にあらわ

これこそ畏しくぬしきもすく取取ん

X 一九三一年

いんまはじちるとはなぬらぬり

新園ん改はわんは同じくまはまの謎とき

わんはこゝろのまが人しりいものま



十月十九日

肥田天野と三越で

x

私は見た

上りゆく仲年の男を

その人は詩人のやましの眼と

やせた体と

古閑けた外長と

脚を細くスボクとを携つてゐた

失業してから何ヶ月にわたるのだからか

入口のボーイの羨すむ眼に送つて

彼は賣場の方へ

踏踏と歩いてゆく

彼はライオンのゐる入口を

けも夕べの出てゆく

帰つた家で

職のち淋しさを啣つて

けんけんを手に持ちながら

(或は子供達をとも)

私は彼を見たゆゑに

すつかり淋しくなつて

階上に昇つてゆく

暖下すし日暮る日のて都會は

い戦ひを  
の毒で、  
山あるの  
る事なら何  
す、そして  
さる様一生  
す

大阪電車 手びき電車  
の通行を禁止する

**大軌電車衝突**  
大阪高校教授  
等十三名死傷

【大阪電話】二十五日午後三時十  
五分大阪上六段宗良行二百連急  
行電車が高津橋通過の際急がしい貨  
物車の横風に衝突即死二名(宗良  
市北安町大阪高等學校教授佐々木  
恒雄(五)氏外一名)重傷十一名  
(内一名は入院後死亡)をだした

二十五  
京町  
近衛上  
阪四士  
谷島  
時  
核  
木

咆吼し渦巻き

煙と埃とを空にあげてゐた

大きな建物から方々の空に

くつまりと白くをびてゐた

一つの回りの

職のち人達が集り昇る

四方を暖下して

度せたり子守泣く子を揺つてゐた

x

高空より鳥渡り<sup>雲</sup>に断<sup>キレナ</sup>自あれ

むさしくやがて雲出た空の隈

一抹の雲残りつ、ゆくゆく

x

赤き空見にとんぼより才風吹かな

さいしては<sup>榎</sup>の昔年くらぬかし<sup>林</sup>小

小春日の梅<sup>梅</sup>咲く<sup>花</sup>花<sup>山</sup>し

丁  
目  
二  
より

紅々不恒清き<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す

はかなきや<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す

誰か見しまんじゆす<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す

秋の原に鳥<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す

中なまやみの<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す

後日多し  
偶々ニ能證セ即集フ開ケル  
曠野摩を回 露ヲモク  
淋しとは<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す

冬を来ると<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す  
わが本路や白雲なむく見つ  
くみか<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す

ニモリぬ<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す<sup>花</sup>花<sup>死</sup>す

十一月廿八日

今舟の祖父東能心の報来

春過聖遠臣外菜園 王維

前年種<sup>の</sup>離故

こゝのまかきなほうばて、

新作<sup>の</sup>菜欄成

まこつとくさ松木<sup>の</sup>けり

昔草爲<sup>の</sup>君子

菜草<sup>の</sup>の香は園<sup>の</sup>いみぢ

名花<sup>は</sup>足長柳

いろとりどりの花の彩

水穿<sup>の</sup>磐石<sup>も</sup>遠

いはにばし<sup>る</sup>松<sup>の</sup>水<sup>の</sup>

藤繫<sup>の</sup>古松<sup>も</sup>生

まじり色こそ松の枝<sup>も</sup>

車<sup>も</sup>畏<sup>も</sup>開<sup>も</sup>厨<sup>も</sup>焚

ゆかり紫<sup>も</sup>さやうばな

末家<sup>も</sup>倒<sup>も</sup>履<sup>も</sup>迎

かゝるとやんあもいと

蔗<sup>も</sup>糖<sup>も</sup>水<sup>も</sup>菰<sup>も</sup>半<sup>も</sup>飯

まさぬけりも<sup>つ</sup>つくし

一<sup>も</sup>切<sup>も</sup>榎<sup>も</sup>西<sup>も</sup>路<sup>も</sup>菖<sup>も</sup>蒲<sup>も</sup>芝<sup>も</sup>菜

てオニ<sup>も</sup>ろの<sup>も</sup>あまわは

傾<sup>も</sup>識<sup>も</sup>蓬<sup>も</sup>園<sup>も</sup>土<sup>も</sup>息

てし<sup>も</sup>未<sup>も</sup>わつ<sup>も</sup>の<sup>も</sup>魚

於<sup>も</sup>陵<sup>も</sup>子<sup>も</sup>自<sup>も</sup>輕

希待一陽來復期

梅<sup>も</sup>香<sup>も</sup>早<sup>も</sup>在<sup>も</sup>床<sup>も</sup>馥<sup>も</sup>韻

十一月廿九日

古<sup>も</sup>氏<sup>も</sup>妹<sup>も</sup>歸<sup>も</sup>郷<sup>も</sup>さ

もみぢばのなごらぬ水や瑠石しあとし

白雲無<sup>も</sup>盡<sup>も</sup>時

子<sup>も</sup>二<sup>も</sup>山<sup>も</sup>館<sup>も</sup>はくもな<sup>も</sup>い<sup>も</sup>く<sup>も</sup>と<sup>も</sup>び<sup>も</sup>昔<sup>も</sup>中<sup>も</sup>と<sup>も</sup>来<sup>も</sup>物



二日 吹満州の兵馬くびたつ 地近畿中の人先々々るなり

(い)の英子 飢寒に困しむにあらざる 語まゝにけふも三連りつ

十二日 近事報訊

も暗しやれど人の眼光りたり 風吼る 夜をおそく帰らま

むつ橋の枯木存り 友を風すむめ、もう木 鳴りつゝ、友をさるなり

枯梢 風わたりつゝ、なみあめめ、その 糸乃の先上 風空ありめ

まよふに 紅花をかこるめ 木林ちうめ 鉄路は 友りむれ 華りあつ

冬に入つて 三三もさむしも 鉄道の しろりの 友りみつめ 木てあふは

あふさそ 混血見りの 眼の？) オチをきそさむしと 見つゝ、われけるなりめ

あふさそにわと 女の 見入ふしと おもひ 不三見ゆる 駢の 廊壇にるつ

× 新しまな 翁本朝英、老田金一君。

はうけえいまつふ 朝の 雲をさおもむ 街行く 朝も 中村まゆみとなりめ

その二

いつか能行機 狙撃手の防壁を  
なるといふ 大子図書館の  
樓上に昇る

初冬の風は快く冷たい  
遠い上州甘楽郡の山が  
なまぬる光をさす  
群は

十二月十四日

新しい外套をこきりた

僕は闘士としての決意をもたぬ

松本善海は文字部学友会委員となつた

連絡を断つたしおの是非

x

愁はつまじ、いくせにも

かなしき人妻

こころをこめ

x

軍人厨内金

帝大丈二一九。四近く、

x

愁はつまじ、いくせにも

十二月十五日

船越の女急死の報あり、わが母と朝ナ町を言を記す

あゆしゆしと降り、宮城の暗さを祈りぬつはんや

おほろたいたのうらを融るしとさしたまひのてんたま

美しきとせと下り、西の松樹園なまもつてしさを

枯んを木まよふとぬぞ、雪を映りて相抱ふや降る雨に夢をいぬ

高窓に輝く雪の宮とありぬ、西やく旅の舞はすきたり

冬川のさびしき、さむけをり上の山ときのまま

冬海のくもを暗き沖にまき波頭向しその白さはも

音もなくたけてある冬海の波に三三ろはひやまひしも

ひるすきて白銀の山現は水ぬそのはるけさに泪ゆしりつ

伊吹嶺のふもとのおたりよるくらし此をわはなぬわがいのちを

おのつから雪空をかむる夜の山のまろを見えつこころおどろ

x

しほや 極月空のこりこちや風おけむゆく鳥はぼさをならし

おけまつつみはるけはよともごらの泪もほるそのまひしを

左の野の枯れ先に眠る獣かそのまま死なば何ぼくをなしも

x 祖父も既にみまかりあり

冬の目のすきまはおほちちのこゝろをまなといまはさすま

おのつから冬を至る気におほちちはまなごりて此にたまひしか

ゆもごうにやまおそてこそしおの秋の月かあんとなりぬ

おほちちのつひのつひと百万遍じゆずまもも眠さもこら

x

十首平の 松浦悦郎

サ藤井

あ、おこしわ

三三ろもしんはこ

ゆましとま見しま青鴨は

いまもしつゆく眠りて

その頭蒼く光るなり

暗ま水面に風おけは

眠る鳥もくわくなり

あまらの果てしなき木と

冬まし日よりわか胸に

いそに思進り又さうす

いま鴨にせむ進が

x

近く刈入の清く田に

穀類豆の芽の列り。

その向ふに菫葉鳩。

や、ま遠く樺の葉落葉林。

古塚へわたる鳥

白鷺の空を渡る聚衆

遠く赤ちやけた山脈

なほはるかにおほむら——その空を、まひし。

x

NOËLは淋しや

エス棟信がゆりかこもがらに

何のめいみかありませ。

雪空は更なく

わがいのを歌に歌おそり

いそしく人々は

ゆますすおじなまげもの、

われはゆく所もなく

空取りも更くさまよ。

ま青な葉をもつひらきに

あふのい赤い空をたぐさるは

エス棟もよくくのおしとち

ゆまならあ、はあするまに。

エス棟漢字語のなれす

もつたのなくも吐いたあけく

どこで酔かたや、うま小豆

か、る野路の夜をまを仰けは

あふあふ雪をまて

みぢの国一 土のしやとほ  
よはせぬぞいはせぬぞ。

十一月二十四日 友直、在位同、松浦とトシムル

鬼澤の追悼文書く

木の葉より空のさす枝に鳥も木も

十字路なる石標<sup>しるべ</sup>をみす日敷へて

あは木もやみつむしけれも 勅<sup>ちく</sup>又<sup>また</sup>不<sup>ふ</sup>て

長<sup>なが</sup>そ<sup>そ</sup>夜<sup>よ</sup>に凍<sup>こ</sup>りあまるや 諏訪<sup>すわ</sup>の湖<sup>うみ</sup>

故<sup>こ</sup>國<sup>くに</sup>をいむら花<sup>はな</sup>をま<sup>ま</sup>空<sup>そら</sup>の敷<sup>しき</sup>

十一月二十五日 一西川 草ま

あはちんよみおのほかえんよむともこの友にわなわなまてあそむ

をみな抱くす(は)はばむらむせう中の<sup>かほ</sup>見<sup>み</sup>た<sup>た</sup>を<sup>を</sup>枝<sup>え</sup>合<sup>あ</sup>に<sup>に</sup>陰<sup>かげ</sup>合<sup>あ</sup>す<sup>す</sup>わ<sup>わ</sup>は

十一月二十四日 一再上京

松の向にいまあふいと唐<sup>から</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>子<sup>こ</sup>ほす<sup>す</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>三<sup>さん</sup>河<sup>が</sup>の<sup>の</sup>國<sup>くに</sup>は

行<sup>い</sup>先<sup>さき</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>ば<sup>ば</sup> 洞<sup>ほら</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>も<sup>も</sup> 卵<sup>たまご</sup>子<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>白<sup>しろ</sup>は<sup>は</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>け<sup>け</sup>

あは木なる道化とあそぶか、あまは

檜<sup>ひの</sup>の<sup>の</sup>木<sup>き</sup>は<sup>は</sup>常<sup>とこ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>松<sup>の</sup>の<sup>の</sup>木<sup>き</sup>は<sup>は</sup>何<sup>なに</sup>に<sup>に</sup>。

十二月七日

京<sup>きやう</sup>上<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>も<sup>も</sup> 京<sup>きやう</sup>上<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>も<sup>も</sup>

川<sup>か</sup>久<sup>く</sup>保<sup>ぼ</sup>保<sup>ぼ</sup>印<sup>いん</sup>印<sup>いん</sup>君<sup>きみ</sup>

十二月三十日

九<sup>く</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>一<sup>いつ</sup>六<sup>ろく</sup> 京<sup>きやう</sup>上<sup>じやう</sup>

井<sup>い</sup>山<sup>さん</sup> 草<sup>くさ</sup> 池<sup>いけ</sup>田<sup>でん</sup>菜<sup>さい</sup>一<sup>いつ</sup>

川<sup>か</sup>久<sup>く</sup>保<sup>ぼ</sup>保<sup>ぼ</sup>印<sup>いん</sup>印<sup>いん</sup>君<sup>きみ</sup>

卯<sup>う</sup>和<sup>わ</sup>七<sup>しち</sup>年<sup>ねん</sup>

十一月一日

他<sup>た</sup>郷<sup>きやう</sup>迎<sup>むか</sup>春<sup>はる</sup>

あはま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>ひ<sup>ひ</sup>む<sup>む</sup>せい<sup>せい</sup>にあ<sup>あ</sup>わ<sup>わ</sup>や<sup>や</sup>武<sup>ぶ</sup>藏<sup>ざう</sup>野<sup>の</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>一<sup>いつ</sup>寸<sup>すん</sup>に<sup>に</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>朝<sup>あさ</sup>

一<sup>いつ</sup>寸<sup>すん</sup>の<sup>の</sup>雪<sup>ゆき</sup>の<sup>の</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>け<sup>け</sup>は<sup>は</sup>街<sup>まち</sup>道<sup>ぢ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>り<sup>り</sup>つ

禮<sup>れい</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>城<sup>じやう</sup>け<sup>け</sup>水<sup>みづ</sup>は<sup>は</sup>雨<sup>あめ</sup>相<sup>あ</sup>林<sup>りん</sup>お<sup>お</sup>み<sup>み</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>路<sup>ぢ</sup>に<sup>に</sup>肥<sup>こ</sup>掘<sup>く</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>み

二<sup>に</sup>の<sup>の</sup>國<sup>くに</sup>の<sup>の</sup>春<sup>はる</sup>は<sup>は</sup>家<sup>いへ</sup>々<sup>々</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>す<sup>す</sup>む

わ<sup>わ</sup>木<sup>き</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>は<sup>は</sup>水<sup>みづ</sup>中<sup>なか</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>は

思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>み<sup>み</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>み<sup>み</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>せ<sup>せ</sup>にあ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>を

情<sup>じやう</sup>濃<sup>のう</sup>く<sup>く</sup>ニ<sup>に</sup>ニ<sup>に</sup>ろ<sup>ろ</sup>細<sup>こ</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>な<sup>な</sup>にあ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>を

さ<sup>さ</sup>て<sup>て</sup>わ<sup>わ</sup>木<sup>き</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>て<sup>て</sup>、<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>き

さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>ニ<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>解<sup>と</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>し

わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>是<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>一<sup>いつ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>り

な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup>人<sup>ひと</sup>命<sup>いのち</sup>を<sup>を</sup>捨<sup>す</sup>て<sup>て</sup>む。

十一月二日

井<sup>い</sup>山<sup>さん</sup> 草<sup>くさ</sup> 池<sup>いけ</sup>田<sup>でん</sup>菜<sup>さい</sup>一<sup>いつ</sup>





不平と云ふ

お木は下移せにせられたる。

お木は金糸針をさしたる耐(つ)田かた

すゝわんくし戸をさす代り

その痛む懐木のつ

x

お木はまはに文芸に執着をもち

しむもりの型の古さ

お木は一匡田郎の驛帳を

快くは用はせ

お木の仲間のほろを各まきはじめ

お木はお木を矢うちかて

おま(は)おま(う)と 破解せぬ

二つの魂をもちぬ人肉か何なるか

おま(向)身がさす人肉をさすかお木は

何おま(ま)はそんなに悦しく立廻るか?

お木は以後沈黙を守り

一匡田郎のあまのこころでは。

x x

コキート

お木は蓮の花を足もとに花のまはりの花を足もとに眼に入る

その花はお木蓮の意識の中にある (以下子明)

お木は蓮の意識の中を踏在する、意識の中を踏在する花をお木蓮は

コキートの対象とよび

二月二十一日 原始の始原

蜘蛛の族は

羚羊の族と相争ふ

その地帯の彼方へ

彼の族、伏地へ

侵入すべし日を待ちかた

凶日か照り

野にさすくたものは淵みかち

蜘蛛の群は何二の進ましむ影をさすか

蜘蛛の族は

此を目標して大足すする

あすこには 敵と食物がある

そして実らの草野野に残るは

蜘蛛の 食物は ばかり

雲をさす柱

地を母と柱

敵と食物と争めて

移した族は再び帰らぬ

月は

月は

幾か二の柱をめぐり

柱の草野を食ひあす由あり

蜘蛛の体色を彩る

産卵の月を脱せしむ時

←

月と

月と

下へ立ち

子足の族は蜘蛛の眼をさすか

八條の宮よみならす時雨空  
昭王の塚秋の日をあばるる

東洋史同人云いて  
一月二十六日 岡部長立亭君に献せん

一月二十七日 橋本 三男君

蠟梅のすたれし園に咲く見つつ春来む期もともに語りし  
北の風ニの犬野をばわたりうはあまの力外にもおもて吹まひり  
北風のわ水がほほを吹くときはわらばんとして 眼をなけてまを

朝鮮の友 一 趙君

君の物思ひがすくぬやせたりき腹を  
かつて僕は淋しむつたが  
いま僕ちうもそふほやせたりつた  
趙君

君の顔が困しみのため正んてあるこそ  
あつて僕は遠はそつ利己的な美しき好まから  
嘲りわうつたが

今僕ちうもいふはととする 彦  
しうわしとわすてまゐるのそ 何としやいもない  
趙君

君の船はほろぼろだつた

二

兵隊の出征が勇ましいところなので

停車場まで見に行つた

旗を立てて人達が見送つてゐた

兵隊はテして他見したから

お互同志ばなししてゐた

旗を北風が吹いて

発車時刻はまゝ来ない

打長さん帽子を飛ばした

その帽子には入場券が挟んであつた

僕はもし一つは捕客車を見に行つた



サマンロト

三、嶺

このふるまくぬむ林の疎林のしましうま富士のやねあうは木ぬ  
 ものうはわあうける時にすぬせんくゆほのみにほあとわ木は知うたり  
 あさしののめじ見ゆる野に冬立うそ丸三郎の長須は長けあか  
 二よりぬの油あうわく喜あはすけしとひるのゆめにいまあしりぬる  
 勿たしまや二十有豆のますうもの木花しやむ勘立と讀するか  
 そのこまむたなひせあとおも(じもたうちねも)ばとこのうはあなし

X M, M.

昔葉のつうあ木る野はとほく開け雪まああままのこま山見や